光を型抜き

光を型抜きしようとしても、できないのだった。光だからといって、星型のクッキーにはならないのだった。クッキーは食べられるので価値があるのだった。光はそこにあるのだった。そこにある光が言った。集まりたいんだよ、おれは。ずっと拡散し続けてるわけだけどさ、身体なんか永遠に伸びていくからね。いつ生まれたかも分からないし、永遠に伸びて薄くなっていくよ。永遠なんてないよ！

永遠という文字が言った。永は遠のことが苦手だし、遠は永に近づかないようにしてるんだ。嘘を作るために集まるから、どちらも気まずく感じるんだね。気まずいの？　と友達が言った。正方形で区切られた箱の中にはクッキーが一枚、入っていた。渡せないまま、余っちゃった。別に悪い人じゃないんだけど、気になりすぎてずっと同じ位置にしまってる。チョコチップが乾いてこぼれ落ちそう。こぼ

れ落ちるのは固体がいい。フローリングの床が言った。液体だと、染み込んでこちらの一部になってしまう。でも、涙が固体じゃなくて良かったと思うよ。田んぼの方から声が聞こえた。固体だったら部屋いっぱいに溜まって、誰かに投げつけていたかもしれない。不規則な形の黄ばんだ塊を、何度も何度も投げようとしたでしょう。ベランダから欠片が落ちて、発掘されるでしょう。発掘されたのは私だった。薄くなりきった光を浴びて、黄ばんだ身体が違う色に見えた。